

『いじめの背景と、学校のこれから』

***** はじめに *****

ここ近年、ナイフ事件・学級崩壊・不登校・いじめ・自殺など、子どもたちを取り巻くさまざまな問題が重大化し、大きな社会問題となっていることは周知の通りです。教育再生会議とか教育基本法改正の中でいじめ問題等が取り上げられていましたが、いじめや不登校などの背景や根本的な原因究明、さらに子どもたちをとりまく環境（現代社会の環境）が子供たちの成長にどう影響しているのかといった分析、それらを踏まえた具体的対策の検討などが、いまだに真剣に取り組まれていません。

そこで、子どもたちをとりまく環境がどう変わり、その環境が子どもたちにどのような影響を及ぼしているのか検証し、こどもの健全育成のための具体策を提示してみました。

この資料が、子どもたちと将来に、少しでも役立てば幸いです。

***** 資料の内容 *****

:いじめの背景と、"学校や大人"の役割 【本資料のまとめ】

:子どもを取り巻く今昔と、"いじめ"の背景

:『学校の集団規模』と、いじめの構図

【おわりに】

平成19年1月

薄井 徹

：いじめの背景と、"学校と地域と大人"の役割 【本資料のまとめ】

		子供をとりまく環境		
		現状（詳しくは 参照）	改善向上のための取り組み案	今後の具体的対応
家庭	親	親にゆとりがなく、愛情と安心が不十分で、子供の心を不健全にしている。	・親の就労時間の改善教育 ・会社や企業への指導 ・親の教育	『家庭、地域、遊び』など、こどもを取り巻く環境は、劇的に変わりました。こどもを取り巻く環境は、この2、30年ほどの間に極めて悪くなってしまったのです。 社会構造の変化であるこれらの問題を解決することは困難を極めます。一部のひとの活動だけではどうしようもありません。 まずは、社会構造の変化が、子どもの健全育成に悪影響を及ぼしていることを、社会全体が認識する必要があります。そして、子どもを育む環境改善を、社会全体で何とかしようという雰囲気や世論が望まれるのです。
	兄弟	核家族や少子により、多様な人間関係や『声』の積み重ねが少なくなり、安心や愛情が不足している。	・少子化の改善 ・親や大人の教育	
	祖父母			
	親戚			
地域	近所の友達 近所の大人 地域の祭り	『地域が子供を育てる』 ということはすでになくなり、多様な人間関係を学ぶ場をなくした。	・育成会の見直し ・高齢者による ・祭りや行事の復活 ・地域の役割の教育、啓蒙	
	遊びの種類 遊び相手	テレビとゲームによるひとり遊び。 遊びの形態の変化により人間関係を学ぶ機会をなくした。	・昔の遊びの復活 ・テレビやゲームを減らす ・本来の遊びの役割の教育、啓蒙	
学校	保育園	コストが優先され、規模や定員が大きくなり、自然で健全な保育教育環境でなくなっている。	・保育、教育現場の問題把握や役割などの見直し ・適正規模の検討、導入	すでに大きな社会問題となっているいじめなど学校問題は、社会構造の変化も大きな要因です。 そして、この社会の変遷を元にもどすことはできません。学校など公共機関においては、こういった社会状況の変化に対応する必要があります。健全育成のための学級定員の少数化や、適正規模の見直し、小中一貫校の導入など、こどもの健全育成のための環境改善をめざした取り組み姿勢がまったくなかったことも大きな原因です。不登校やいじめを早急に減らし健全な学校教育環境を提供するためにも、このような取り組みに早急に着手しなければならないのです。公共施設である学校環境の改善に真剣に取り組み、学校の再編成に早急に着手しなければならないのです。
	幼稚園			
	小学校	大きな社会構造の変化は子供を育む環境をも悪化させ、不登校やいじめ・自殺など大きな社会問題となっている。学校問題が多様化重大化しているにもかかわらず、学校の適正規模や学級定員の見直し、小中一貫校など学校教育環境の改善向上への取り組みがまったくなされていない。	学級定員の少数化に、いち早く取り組まなければなりません。 そして、幼児から中学生位まで年齢差を越えた多様な人間関係を経験する場を提供すべく、1学年1学級、幼小中学校の一体化、分校方式など、学校の再編成をも視野に入れた大胆な施策の導入検討も必要なのです。	
	中学校			
	教師			
	学校の規模			
部活動	上記のような学校再編成と同時に、部活動についても再構築しなければならない。			

日本の社会は、わずか数十年という短期間に豊かになり社会構造や生活習慣も大きく変わり、こどもたちを育む家庭・地域や遊びそして学校も大きく変わりました。こどもたちをとりまく環境がどう変わり、その環境がこどもたちにどのような影響を及ぼしているのか検証してみると、そのいずれの環境もこどもの健全成長に悪影響を及ぼしていることがわかりました。まさに、ナイフ事件・学級崩壊・不登校・いじめ・自殺などの学校問題の重大化がそれを裏付けているのです。（詳しくは をご覧下さい。）

こどもをとりまく『家庭、地域、遊び』という環境を改善してやることは当然ですが、容易なことではありません。さらにやるべきことは、『学校』の環境の改善向上に向けた取り組みです。しかも改善の余地が大いにあると考えられます。改善に向けた取り組み・検討をおこなうべき事項を下記に示します。

- ・学級定員の少数化
- ・学校規模の小規模化
- ・1学年1学級化
- ・幼稚園小学校中学校の一体化
- ・小中一貫校
- ・小規模化のための分校方式
- ・その他

こういった学校のあり方の改善（**学校の再編成**）に、早急にそして真剣に取り組む必要があるのです。

子どもを取り巻く今昔と、"いじめ"の背景

子供を取り巻く環境		昔	現在	子供の心の成長に対する影響
家庭親戚	母親	いつも家にいた。保育園などもなかったの で、幼児期までは母親が 祖父母など身内が常に子 供に接していた。	家にいる母親が少なくな った。勤める母親やシングル マザーも多くなり、何らかの ストレスを抱え、それを癒す 人が身近にいない。	昔に比べ親が子供のそばに いる時間が短くなった。これ にとともに、子供にとっての 安心と愛情が十分でなくなり、 情緒や精神状態を不安定化 させている。子供と遊ぶなど 具体的に接しなくても、いつ も近くにいることが子供にと って安心なのですが、そうで なくなっている。そして、親 のゆとりのなさとそのストレ スは、子供の心を傷つけ、虐 待となっている場合もあり、 どの家庭でもありうるのだ です。
	父親	日が暮れば帰宅した。農耕 や自営が主だったことから日 中も身近におり、地域の子 供たちも含め見守っていた。	残業や夜勤など勤務状況は 過酷で、家にいる時間が短 い父親が多い。こういった状 況下では、家庭における父 親の役割を果たせないどころ か、ストレスのはげぐちとな り、健全な家庭環境でなく している。	
	兄弟	多い。	少なくなり、一人っ子が多 い。	
	祖父母	同居していた。	祖父母がいても同居してい ない家族が多い。	
	おじ おば	たくさんいた。	昔より少ない。	
	いとこ	たくさんいた。	昔より少ない。	
地域	友達	近所に子供が多い。幼児 から中学生位までが一緒に 遊んだ。	少ない。かなり限定的。	『地域が子供を育てる』とい うことはすでになくなって しまった。家庭と学校以外に 地域の人ののかかわりを通 じて多様な人間関係を学ん できたがそれがなくなって しまった。(ゲーム遊びや塾 や部活動のあり方もおいに 関連していることを忘れて はいけない。)
	大人	家の敷地や神社寺などが 遊び場なので多くの大人が 関わっていた。	子供は家の中で遊んでいる から、近所の大人は関わり ようがない。また、家に いる大人も少なくなった。	
	祭り	年間を通じて多様な祭り や行事があった。	祭りや行事が少なくなり、 あっても参加しない。	
遊び	種類	屋外で、幅広い年齢層の 子供がその日のメンバー や季節・天候・場所など によりさまざまな遊びの中 から選んで遊んだ。また、 遊びにはルールが必要で そのつど決めた。	テレビ、ゲーム、ビデオ。 マンガ読み。こういった遊 びはまったく人と接しない。	本来、子供にとっての遊び は、さまざまな経験をする ところで、特に人間関係を 学ぶなど極めて重要な役 割を果たしてきたが、ここ 2、30年の間にテレビと ゲームおよび少子化により、 遊びの形態がひとり遊び となってしまう、人間関 係を学ぶ場所としての遊 びではなくなってしま った。 幼児期から中 学生くらいまでの毎日、 日々異なる遊びの集団と、 さまざまな遊びから多 様な人間関係(年上の子 は年下の子を面倒をみ たり、年下の子は優し さを感じたり尊敬したり、 感謝したり、相手の立 場を思いやる、礼儀、 あいさつなど)を学ぶ 人間形成にとって欠か すことができない存在 であったが、それがな くなってしまった。
	相手	地域の幼児から中学生 くらいまでが遊び年齢 層が広い。年上の子は、 集団をまとめ小さい子 の面倒を見たり尊敬さ れたり、年下の子はそ ういった集団と体験 から多くのことを教 わるなどした。また、 子供どうしは感情がぶ つかり合いけんかにな ったりするが、そう いった経験の積み重ね によって、相手の立 場を考えたり相手を 思いやることができる ようになった。	ほとんどひとり遊び。友 達と遊ぶといっても各自 ゲームでひとり遊び。 地域ごとに自然に発生 する遊びの集団がな くなった。(近所の 子供たちが集まる ということは、年齢 別や能力別などの 集団ではない多 様な人間集団で、 これが自然な 集団といえる。)	

	保育園	昭和40年代以降、あちこちにできた。	公立保育園の統合が進んでいる。働く母親が増え保育園が増加している。待機児童を減らすべく、結果として園児のプロイラー化が懸念。	財政難下、定員増加や統合が進み優、保育園の規模が大きくなり保育子育て環境は低下している。保育園児は幼稚園児に比べ、親と接する時間が短くストレスが多い。
	幼稚園	"	民間経営のため、規模や学級定員に問題があるところもある。	民間のため利益優先となる傾向があり、規模のマンモス化や定員オーバーなど幼児教育現場の子育て環境は低下している。
	小学校	学校における子供の数は今より多かったが、学校をとりまく家庭や地域といった環境が人間社会集団として健全であったことから、荒れている現在の学校に比べ良好な環境であった。	現代の学校の実情と問題は、愛情・安心と年齢相応の人間関係の経験が不足したまま小・中学校という集団の中に入り、その学校は大規模な集団で、自然で健全な人間関係を営める状況でないこと、愛情・安心と人間関係が十分でない子供たちに対し、個性と学力を重視しゆとり教育にも取り組むなど学校現場は多くの矛盾と問題があること、こういった状況で学級・学校運営を担う教師の負担は膨大で、現実的には教科科目の学習指導が精一杯で、道徳や人間関係など個々の個性を重視しながらの多面的な教育指導はできず、こどもをはぐくむ学級・学校という集団は健全性を失っているのです。その結果として、校内暴力、学級崩壊、不登校、いじめ問題など、学校問題が極めて大きな社会問題となっているのです。さらに大きな問題は、こういった学校問題は常に、その現場の教師や学校がそれを管理する教育委員会の対応のみが非難され、現代社会の構造と学校の実情に根本的な原因があることが一切指摘されないことを声を大にして言わなければなりません。	こどもをとりまく環境は悪化しました。親にゆとりがないことは子供にストレスを与え、幼少期からの本来の遊びがなくなり、コスト優先の保育園か幼稚園を経て、人間関係の経験が乏しいまま小学生・中学生になるのです。そして、学校は、公共性・道徳・食育・個性そして学力などさまざまなことが要求されるのです。そういった中で、学校では、学級定員の少数化でさえ進んでいないのです。その結果として、校内暴力、学級崩壊、不登校、いじめ問題などを重大化させているのは当然のことであるといえるのです。ここ数十年間に、プールや体育館など学校施設は充実しましたが、施設整備は進んだのですが、現代社会の子供たちの問題や教師の負担・学校の役割を踏まえた学級や学校の規模など、子供たちを健全に育む環境整備はまったく行われてこなかったのです。人間関係の経験が乏しく愛情や安心と十分でない環境の中では、当然のように欲求不満やストレスをためた子供が多くなり、いじめが発生するのです。そのいじめを見た子供たちには自己防衛本能が働き、自分だけはいじめられたくないと考え、いじめる側になったり加担したりするようになるのです。だから、いじめをみつけ罰則を与えたりカウンセラーといった対症療法だけでは、根本解決にはならないのです。
	中学校			
学校	学校の規模	子供の数が多かった。 学級定員：50人、45人	少子化と財政難から学校統合が進み、中大規模校化が進んでいる。また、統合により学校施設設備の充実が進むが、 子供の心の健全成長を考えた学校環境づくりなどの取り組みがまったくなされてこなかったことも強く指摘しなければならない。 学級定員：40人	価値観が多様化し個性が重視され、校内暴力、学級崩壊、不登校、いじめ問題など、学校問題が極めて大きな社会問題となってきているにもかかわらず、学級定員数をわずかに少なくしているだけで学校の適正規模()の見直しや小中一貫校などの学校の再編成など、学校教育環境の改善向上への取り組みがいまだに行われていません。学校における子どもを育む環境も、悪化していると言えるのです。

部活動	<p>子供達の活動を教師が指導。課外授業的。</p>	<p>子供達の指導に教師や親や民間人など多様化。</p> <p>練習、大会、試合など部活に占める時間がかなり長くなった。</p>	<p>小学校の場合、指導運営する母体が明確でなく学校や教師が関与しない場合もあり、さまざまな活動形態である。帰宅後夜7時からの活動や、土日の拘束時間の長い練習や試合など、若年のこどもにとって疑問視されるケースもある。</p> <p>中学校で生徒数の多い大規模校では、部員数が多い部が多く、その分強いチーム編成が可能となり選抜化が進む。その弊害として、多様な経験の場でなくなる、活躍の場がない、注目されないなど生徒のやる気をうまくいかしてやれないなど、本来の学校の役割を果たせない規模の学校もある。</p>
教師	<p>学級定員は現在より多かったが、現在のような多様な問題がなかったため、教師の重圧や負担は少なかった。親や地域の住民からは尊敬され応援されるような立場であった。</p>	<p>価値観が多様化し個性重視など多様な対応や、学力低下、不登校、いじめ問題の対応など、教師の負担は計り知れない。まじめな教師ほど負担が大きくなり、結局やめざるを得なくなるなど、手を抜いたほうが得という皮肉な現象にもなっている。また、現代の教師は、親や地域住民やマスコミからも監視されるような立場となってしまう、現場での子供への対応は神経質になり、結果として良好な教育環境となっていない。教師は応援されるような立場ではなくなってしまった。</p>	<p>左記の状況を踏まえると、教師の質が低下し、やる気のある先生が少なくなっていると言われる原因が良く分かる。こどもの個性や価値観（悪く言えば自分勝手）が多様化しそれを尊重しなければならず、学力低下や不登校・いじめ問題など多様な対応処理も求められるなど教師の負担が極めて大きくなっているにもかかわらず、教師への風当たりが強くなるだけで学校教育環境の改善向上など根本的な取り組みががまったく行われていない。こういった対策のなさも、さまざまな学校問題を重大にしているともいえる。</p>
その他	<p>塾</p> <p>なかった。</p>	<p>さまざまな塾があり、かなりの小中学生が通っている。昔はなかった塾に費やす時間の割合がかなり多い。</p>	<p>塾や習い事により、家庭ですごす時間が短くなり、地域の人や近所の友達とのかかわりがほとんどなくなりました。その合間はゲームやテレビとなり、多様な人間関係を学ぶ場が少なくなった要因のひとつです。皮肉にも塾が数少ない交流の場のひとつなのです。</p>

【いじめ・自殺や不登校などの背景(まとめ)】

親	親といっしょにいる時間が短くなり、安心と愛情が満たされていない。親にゆとりがない家庭が多くなり、子供に過度のストレスを与え心に傷を負わせ、虐待になっている場合もある。
家族 親戚	子供をとりまく親戚など身内が少なくなり、多様な人間関係や、『声』の積み重ねが少なくなり、安心や愛情が不足している。親への『声』も少なくなり、親の心にゆとりがない。
地域	地域の子供、地域の大人との交流がなくなった。これにより、多様な人間関係を学ぶ機会がなくなった。また、身内も含め多くの人との関わりがないことは、親の心も不健全にしている。
遊び	テレビやゲームにより遊びの形態がひとり遊びとなり、多様な人間関係を学ぶ場を失ってしまった。相手の立場を思いやり、面倒見たり、尊敬したりなどの機会がなくなってしまった。
保育園 幼稚園	コストが優先し、規模や定員が大きくなり、子供一人ひとりの問題を十分把握しきれず個別の指導・養育ができない、自然で健全な集団規模でなく、多様な人間関係を体験し学ぶ場所がなくなってきている。
学校	年齢相応の人間関係の経験が不足したまま小学生になり中学生になる。そういった子供たちを受け入れる今の学校という集団規模は大きすぎ、自然で健全な人間関係を営める状況でなく、結果として学級崩壊・いじめ・不登校など重大な問題があとを絶たない。

保育園・学校等の規模の問題は、【 : 『学校の集団規模』と、いじめの構図】を参照。

以上、子供たちを育むすべての環境が悪くなってしまったことがわかります。その結果、学校における不登校やいじめなどの問題が増えているのです。現代社会は物質的には豊かになり、家や学校など施設設備は良くなりました。しかし、子供たちの心をはぐくむ環境は極めて悪くなってしまったのです。

現代社会の中で、重要なこと優先されていることは”経済”です。しかし、もっと重要なことは、こういった子どもたちを取り巻く環境を改善してやることです。

社会全体で何とかしようという雰囲気のでてくることを期待してやみません。

【 『学校の集団規模』と、いじめの構図】

自然で健全な人間関係が営める規模

人間は古来から群れをつくり集団の中で人間関係を上手にこなして生きてきました。100人規模の集団と1000人規模の集団を想像してみてください。100人程度でしたら名前はもちろん性格のことなどもわかりますが、1000人となると顔も名前も知らない人ができます。人間の集団が300人を越えるような規模になると、すべての人同士がとの関わりが難しくなり、他人事や無関心が多くなり、あいさつをしなくなるなど、健全な人間関係を営める社会集団でなくなるのです。自然で健全な人間関係が形成できる集団規模は200人から多くて300人程度以下であるといわれるのです。

これは学校という集団においても同じです。同級生はもちろん、全校生やすべての先生をお互いが把握しさらには地域の大人などからも声をかけられるなど、年齢差を越えて多様な交流ができる環境が、学校という集団にとって必要なのです。常に誰かに見守られているような安心感があり、自分が自分自身の存在を感じ理解できるような状況は、心の健康・健全な精神の育成に良好な環境であるのです。これができるのは全校生で300人程度以下の中小規模校なのです。大規模校では、クラスの数や同級生の数が多く同級生との関わりが主となります。結局は、話さない・知らない・あいさつをしなないなど、無関心や他人事が多くなり健全でなくなるのです。

学年差や年齢差をこえた関わり必要性

同級生同士の中では、あこがれられたり、尊敬されたり、感謝されたりする機会がほとんどありません。これは能力や経験に大差がないからです。これに対し、年齢差を越えた関わりや交流が多くなると、その子どもたちはさまざまな体験をすることになるのです。

年下の子は、おにいさんおねえさんに面倒をみてもらったり教えてもらったりすることで年上の人にあこがれます。年上の人や行動や活動を見ることだけでもあこがれたりするのです。親に言われてもやらないこともお兄さんやお姉さんと素直に聞くのです。そして早くお兄さんやおねえさんのようになりたいと思うことは、目標を持つことになり、向上心を育み、お手伝いをするようになったり、年下の子の面倒をみたりするようになるのです。そして、こういったことを大人にほめてもらえることで、子どもは健全に成長していくのです。

そして、年上の子は年下の子から、あこがれられたり、尊敬されたり、感謝されたりする機会が多くなるのです。こういったことは極めて大切なことです。同級生同士の中では、こういったことはありません。成績がいい子や運動能力が優れた一部の子は、それ自体で自分の存在感を認識することができるのですが、そうでない子は自分の存在感を感じることはできないのです。しかし、異年齢集団の中では、大きい子には大したことでもなく小さい子には「すごい」と感じ、尊敬されたり、感謝されたりするもので、これはとても貴重なことで、自分の存在感を感じることや生きがいを見いだすことができるなど、心や精神の成長に極めて重要な役割を果たすのです。

また、異年齢集団における、あこがれたりあこがれられたりする行為は、具体的に言葉に表さなくても、尊敬のまなざしなど表情で伝わるものであることも付け加えます。、まさに自然な関わりの中で無意識に感じとることができるもので、向上心を育み存在感を感じたり、子どもの健全成長に極めて重要なことなのです。

現代社会において、幼児や小学生・中学生などが年齢差を超えて遊ぶなど交流する機会がまったくなくなってしまいました。本来、子供にとっての遊びは、さまざまな経験を学ぶところで、特に人間関係を形成する極めて重要な役割を果たしてきたが、ここ2、30年の間にテレビとゲームおよび少子化により、遊びの形態がひとり遊びとなってしまい、人間関係を体験し学ぶ場所としての「遊び」ではなくなってしまったのです。従来の「遊び」は極めて意義のある貴重な役割を果たしてきたのですが、その「遊び」がなくなり、それを補うものもなく、まさに大きな問題であることを声を大にして言わなければなりません。

以上から、年齢差を超えさまざまな人と接し、多様な人間関係を体験し学ぶ機会を提供する必要があるのです。従来の「遊び」を復活させることは容易なことではありません。保育園から小中学校を一体化し1学年あたりの人数を少なくするなど、真に自然な環境を提供できるような公共施設の再編成についても、検討・議論が必要となるのです。

しかし、垣根（厚生労働省と文部科学省、児童課と学校教育課など）を越えた検討・議論と計画・実施は容易なことではありません。社会全体で何とかしようという雰囲気が出てくることを期待してやみません。

健全な社会人・大人になるために

社会人になって会社や組織・団体などに属することになると、さまざまな人と関わることになり、人間関係をじょうずにやっていかなければなりません。このためには、子供のうちからより積極的に、年齢差をこえさまざまな人達と関わりさまざまな人間関係を経験させることが必要です。自分の個性や持ち味を認識し、自分の役割を担ったり演じたり、責任感を養ったり、礼儀を学び、相手の立場を思いやることなどまさに多様な経験によって健全な大人に成長させるのです。近年、ニートやひきこもりが多いのは会社という組織の中での人間関係をうまくやっていけないことが原因のひとつです。勉強ができて人間関係をうまくやれない人は会社や社会の中で健全に生きていけません。ニートやひきこもりをなくし、健全な社会人に育てるためにも、年齢差を越えた関わり、多様な教師との関わり、地域の人との関わりなどを提供することも学校や教育の役目です。小中学校の小規模化や1学年1学級化さらには小中一貫校などの導入についても取り組む必要があるのです。こういったことにより、多様な人間関係を経験でき健全な大人に育てることができるのです。

教師の負担差による影響

児童数が多い大規模校になるほど、校長・教頭先生や養護教諭は、全児童の名前や顔を把握しきれなくなるだけでなく、ひとり一人の個性や問題を把握しきれなくなります。担任の先生は、受け持つクラスと同学年のことで精一杯となり全児童に対する気配りができなくなる。親や家庭に問題があったり、友達間の問題があったり、いじめがあったりなど教科学習以外でもさまざまな問題があり、学校でそういったことに気付き対応できるのはまさに教師なのですが、大規模校になるほどそういった対応処置ができなくなるのです。このような心の問題は早期の発見と対処が有効不可欠で、これができるのは、教師の目が届きやすい少人数学級で中小規模校なのです。担任はもちろん校長や教頭・養護教諭など誰かが、子供の表情や行動の変化・異常を発見できる学校環境により、いじめなどの問題を減らすことができるのです。

心の健康に及ぼす教師の役割

中小規模校では、校長・教頭先生や養護教諭など担任以外の先生からも声をかけてもらったり心配してもらったりほめてもらったり相談にのってもらったりなどの機会が多くなります。このように子供は、声をかけられることの積み重ねにより心 が健全に育まれるのです。家庭でも同じで親はもちろん、祖父母・叔父伯母・近所の人など多くの声 が必要なのですが、最近、家庭においてもそういった機会が少ない。したがって、大規模校になると愛情不足を助長してしまうことになるのです。

いじめや暴力の構図

上記から、いじめや暴力の構図 も見えてきます。ひとことでいえば 愛情不足 がいじめなどを発生させるのです。愛情は溺愛することではありません。多くの人の『声の積み重ね』と『まなざし』が 愛情 になるのです。成績が優秀な子や、運動能力に優れる子や、クラスの人気者など自分の個性をうまく出せる子は、周りの人からいつもほめてもらったり心配してもらったり尊敬されたりあこがれられたりなど声をかけてもらえるのです。そうでない子はどうか。ほめられなかったり、心配してもらえなかったり、尊敬されることもなかったり、感謝したりされたりすることもなかったり、表情が暗いことから声もかけてもらえなかったり、こういった状況を想像してみてください。また、自己顕示欲が強いが、これに成績か運動か人気など自分が望むことが伴わなわず、他にこれをこなす人がいると、注目されることがなくなり、結局欲求不満や劣等感を持つなど一種の愛情不足状態になり、それを解消すべくいじめたり暴力を振るったり自己中心的な行動をとり和を乱したりするのです。

このことは、経験を積んできた大人たちは容易に理解できることだと思います。いじめを発見することも大切ですが、学校においてもっと重要なことは、いじめを発生させない環境をつくることなのですが、こういった取り組みがまったくなされてきませんでした。学級定員を少数化し、年齢差を越えた自然で多様な人間関係を経験できる学級・学校編成が、これを可能にするのです。ひとりひとりの性格はもちろん能力など、まさに多様な個性をもった子どもたちは、ひとりひとりが声をかけられ注目され関心を持たれなければなりません。声の積み重ねが愛情になるのです。

"学校"という集団は、埋もれ、忘れられてしまうような"大集団"ではいけないのです。現代の、そして日本における"学校"という集団規模(文部科学省が進めた適正規模)では、結果として、"いじめ"を減らすことはできないどころか、増え続けている要因の一因となっているのです。

運動会など行事について

運動会など行事の役割は、行事という集団行動を通じて協調性を学ぶ、行事を遂行すべく運営者としての役割を認識し、役割分担や協力することやリーダーシップなどを学ぶ、種目や演技などへの出場・出演と、運営への参加を通じて自分の得意なことや苦手なことを理解し、自分の持ち味や個性というものを理解する、さまざまな役割分担を通じて、組織や集団への貢献や責任感を学ぶ、さまざまな参加により、その活躍や貢献をほめてもらったりはげましてもらったりして自分の存在感を感じる、ほかの人の活躍や貢献の様子を見て、応援したり、いっしょに喜んだり、あこがれたり、尊敬したり、多様な体験をすること、ほかの人の失敗やミスを見て、なぐさめたり悲しんだり残念がったりはげましてやることのできるようになるなど、人間として必要なさまざまな体験や経験する貴重な場であるのです。

このように多様で貴重な経験ができるのはどのような規模でしょうか。たとえば、小学校で、1学年1学級30人では全校生で180人です。1学年3学級40人では全校生で720人になります。規模が大きくなればなるほど、出場・出演の機会が少なくなります。それにとまって、前述の多様で貴重な体験をする機会が極めて少なくなってしまうのです。また、行事運営に関わる人数が限られることから運営に携わる機会が少なくなり、そういった裏方的役割にかかわってそういった活躍をみてもらってほめてもらうなどの機会がなくなってしまうことも忘れてはなりません。人数が多い大規模校では、種目へ参加しながらない、運営への協力もしない、種目や演技を見ない、応援しないなど、無関心や他人事が極めて多くなってしまうのです。まさに、多すぎると自然で健全な人間関係ができなくなるのです。

遊びがひとり遊びに大きく変わり、地域がなくなった今日、このような運動会などの行事は子供たちに多様な体験を提供できる貴重なものであることを認識しなければなりません。

また、保護者の立場から考えてみましょう。大規模校の運動会や、人数の多い幼稚園や保育園の運動会やお遊戯会を思い出してください。子供の人数が多いといろんな苦勞や問題があります。駐車場、場所取り、ビデオ撮り、シャッターチャンス逃さないこと、自分の子供をさがすことなど、たくさん苦勞があります。こういった状況では大人は自分の子供のことで精一杯になり、その子供は自分の親に見てもらうことだけに気にとられてしまいます。つまり、自分のことだけしか考えられなくなり、自分の種目が終わるとあとのことには無関心になり他の子のことを見て応援したり喜んだり悲しんだりなどの貴重な経験をできない、いや体験をさせなくしているのです。これでは**相手を思いやる心や相手の立場になって考えることができる**ようになりません。これは極めて重要なことなのです。

人数が多い大規模な集団では、こういった弊害や問題があることも認識しなければならないのです。さらにいえば、大規模校におけるこういった行事では、出場出演する機会は少なくなると、行事自体に期待感や関心がなくなり、その存在意義がなくなり、学力低下という観点からも廃止した方がよいというになってしまうのです。遊びの形態がひとり遊びとなってしまう今日、人数が多すぎて**個**が埋もれてしまうような学校規模は、こういった意味においてもいち早く回避しなければなりません。そして、小規模校ではこういった問題はほとんどなくなります。

地域との交流など課外活動

大規模校になるほど、人数やクラスの数が多くなり、地域の人との交流など課外活動がしにくい。例えば、地元の農家が収穫体験を提供しようとしても、人数の制限で学校側はせっかくの提供協力をことわざるをえないことになるのです。

これが1学年1クラス程度の小規模校の場合でしたらどうでしょうか。農家や企業・商店など何らかの体験を提供する側も、それを受け入れる学校側も容易にできることは、いうまでもありません。

修学旅行や遠足

大規模校では1学年3, 4クラスを超え全校で20クラスにもなります。もちろん学年ごとの行事となるのですが、それでも100人200人規模の行動になるのです。交通手段の確保、日程の調整、宿や施設の手配、受け入れ先や見学先などの制約など、計画し引率する教師の大変さは計り知れません。もっとも、こういった状況になるとコースや日程は毎年同じになってくるのです。つまり、結局は、多様な計画が難しくなるなど、子供たちにとっても監視制限される時間が長くなり、多様で貴重な体験の場でなくなってしまうのです。つまり、人数が多くなるほど目が届きづらいため、そのぶん事故や事件に巻き込まれる恐れがたかくなり、結局は子供にとっても引率する教師にとってもプラスメリットはないのです。それどころか、遠足や修学旅行の意味・意義がなくなってしまうのです。

これが1学年1クラス程度の小規模校の場合でしたらどうでしょうか。集団行動する人数は多くて30人から40人です。団体の人数がある程度以下になると、身軽になり、多様な遠足・旅行の計画が可能で、それを計画し引率する教師の負担も大規模校に較べかなり楽になります。つまり、貴重な体験や思い出を提供できる遠足・旅行が可能となるのです。

このように課外活動や修学旅行・各行事などは、適度に小さい規模が活動しやすいことはいうまでもなく、特に現代社会構造の中においてはそれらの目的や意義のためにも活動しやすい集団規模にする必要があるのです。

現代社会の"集団の問題"

さらに付け加えることがあります。、人間は太古以来動物として群れてきたこと、そして学校という集団ができたのは、この百数十年足らずのことである、ことです。その学校は、基礎知識から高度な知識までを効率よく学ばせるため、能力別すなわち年齢別の集団をつくり、合理主義の中で人を育成しているということなのです。

本来、人は、年齢別や能力別でない多様な人間集団の中で、生きてきたことを忘れてしまいました。他の動物と同じように"群れ"をつくって生きてきたのです。何を言いたいかというと、人は生まれてから死ぬまで、年上年下の人はもちろん老若男女・障害者健常者を問わず多様な人の集団の中で生きてきたのです。おにいさんおねえさんに面倒を見てもらいそしてあこがれ、上下関係をつくり、年上の人を敬ったり、弱い人を助け、あいさつや礼儀を学ぶなど、さまざまな人間関係を経験し、人間関係をじょうずにこなし、生きてきたのです。

現代社会では、学年別能力別の学校や塾にクラブに部活など、自然でない合理主義下の人間集団の中で学び生活しているのです。つまり、真に多様な人間集団の中で人間関係などを十分に経験しないまま成長し、大人になってしまっていることが大きな問題なのです。そして、このことがまったく認識されていないのです。このことも、今後、考えなければなりません。

【おわりに】

この3,40年間に社会の構造が大きく変わりました。遊びの形態がひとり遊びとなり、地域で子供同士が年齢差を越えて遊ばなくなってしまったのです。これが重大な社会問題としてとらえられていないのです。本来の遊びがなくなってしまったことは、人間形成の上で最も大切な人間関係を学ぶ機会を失ってしまった、ということなのです。人間関係をじょうずにこなせない人間性の未熟な大人になってしまっているともいえるのです。

また、学校教育法施行規則による小学校の標準規模（12～18学級）は、昭和20年代に制定され、50年以上余りを経た今もそれを運用しています。これは極めて子供の数が多い時代に、主に補助金配布の観点から制定された基準で、少子化の現在、それを適用する根拠はありません。検証や議論も無く、適用し続けていることが大きな過ちで、大きな驚きです。

こういった観点からも、学校などのあり方を直ちに直視する必要があります。つまり、自然で健全な人間関係を経験できる場に改善する必要があります。50年以上も前に制定された学校の標準規模を早急に見直すとともに、年齢差を越えた子供たちが多様で自然な人間関係を経験できるようさまざまな対策の模索が必要です。子どもたちの成長は待ったなしです。できることからはじめなければなりません。少人数学級化はもちろん、小規模小中一貫校の導入検討などに至急取り組む必要もあるのです。

そして付け加えるべきことがあります。こういったことは"教育関係者だけ"ではだめなのです。日本社会の大人全員が、『いじめ、不登校、ニート、ひきこもり、自殺』といったひとりを取り巻く問題を認識することからはじめなければなりません。問題・課題を認識した上で、子どもたちを育む集団規模など学校などについて、さまざまなアイデア・工夫を絞り出すことなど、議論・検討することからはじめる必要があります。"ひと・子どもたちを取り巻く環境"に、正解はありません。社会問題や社会生活環境の変化などを踏まえ、最良の対策を常に考え続ける必要があります。教育関係者や児童福祉など子どもにかかわる一部の人々が、対症療法的にかかわるだけではだめなのです。地域の大人たちが総がかりで知恵をふりしぼるような体制が必要で、そして、日本中の"世論と議論"を呼び起こすことが有効で必要なことなのです。社会全体で何とかしようという雰囲気や世論が盛り上がることを期待してやみません。